

1年目の感想

佐藤 サチ

大学図書館職員兼非常勤講師となって1年になりました。

卒業以来ずっと公共図書館員として働きつづけ、年度替わりの1日を境にがらりと環境が変わったにもかかわらず心身に変調もおこさずにこられたのは、まわりの皆様のおかげは勿論の事、やはり同じ「図書館」の仕事であるからではないかと思っています。

同じといいながら、というよりも、同じであるからこそ、大学図書館と公共図書館の違いを感じました。その最大の違いは当然のことながら「利用者」です。自校の学生・教職員を主な利用者とする大学図書館と、地域の不特定多数の人々が利用する公共図書館とでは、図書館の3要素である「資料・人・建物」の名称こそ同じですが、中身がまるきり異なります。「図書館サービス」の基本概念が根本的に違うため、サービスの一つ一つに微妙に、もしくは大幅に相違点があります。

特に資料については、カウンターを行き交う資料に目を見開かせられました。公共図書館では禁帯出であったり貸出可でもあまり借りられないものが、普通に貸出返却で動いていること、またその比率の高さ（これは楽しみのための一般書が少ないということでもありますが）は、新鮮な驚きでした。

長年の仕事から公共図書館に関する知識は多少ありますが、大学図書館に関しては乏しいかぎりです。仕事等で内外の大学図書館を10館ほど視察したことがありますが、あくまで公共図書館員としての目で見学しただけのこと、今の役には立ちそうにありません。

図書館員にとって他館を見学することは、「百聞は一見に如かず」で、広い視野を得る、わが身を振り返るといふ大きな効果があります。昨年7月上旬に和光大学（町田市）に行きました。「めざめよ！大学図書館 公共図書館からの提言」という常世田良さん（前浦安市立図書館長・現浦安市生涯学習部次長）の講演を聴くためです。大学図書館員として聴くとあらためてまた興味深いお話でした。当日、講演前に図書館見学がありました。本学と似たような学部編成で司書課程もある大学なので、大学図書館員としての最初の見学としてはとても有意義でした。来年度もせめて1館は見学したいと思っています。

講師としては、通年で教えるのは初めての経験でした。これだけの時間数があればしっかり理解してもらえると予測したのですが、なかなかうまくいきませんでした。夏期講習では、講義内容は理解できたものとして次に進んでいきますが、通年では、学生達の理解度が提出物等でこちらにわかるため、思うようには進めませんでした。自分が学生だった頃の記憶からできるだけ宿題は出すまいとしたせいもありますが、これは来年度の課題です。また、公共図書館員の経験のある講師として、図書館員の仕事の多様性や楽しさを伝えたいという思いもあります。

司書課程を受講したからには、「NDC」や「NCR」や「BSH」、また「検索」と言われても怯まずにテキパキと対応できる（勿論、司書にはそれ以外に必要な能力がたくさんありますが）、そういう学生の養成を目指していきたいと思えます。

（さとう さち 別府大学附属図書館）